

富士紀行 (21) 「アザミ」で「緑」復活を！

富士物語 8号において、富士駐屯地曹友会がフジアザミライン終点の須走新5合目にアザミ（薊）の植栽をしていると書いたが、このアザミは所謂フジアザミである。

アザミは菊科の1属で、殆ど多年草である。世界には250種ほどあると言われており、日本には特に多く、70～80種あり、海岸から高山帯にかけて生育する。日本産の殆どのアザミは夏から秋に花を開く。この中で特に立派な花を咲かせるのがフジアザミである。このアザミの地下に伸びる直根は生育が早く、種子から発芽して3年ほどで長さ1mにもなる。富士山の斜面の砂礫は流れやすいけれども、このアザミの強く太い直根が砂礫の移動を抑えている。大きな頭花は、200～300もの種子をつけ、どんどん繁殖する。

アザミはキリスト教の「聖花」であり、日本でも「アザミの花も一盛り」と、地味で盛りにはそれ相応に美しくなることの例えに使われる。アザミが何故、キリスト教の聖花かというと、聖母マリアが十字架から引き抜いた釘を埋めた場所から出てきた花と言うことで聖花とされた。北欧では、魔女を追い払い、家畜の病気除けや結婚成就のまじないにも効くと信じられている。スコットランドにはアザミ勲章があり、ガーター勲章に次ぐ勲章である。同時に王家の紋章でもある。

「閑話休題」

フジアザミは足場の悪い流れやすい斜面に必死になって踏ん張っている。そして何年かすると土壤も安定し、他の諸物も入り込んでくると言う。この様にして、スコリアに覆われた斜面を緑化してくれる。自然を再生させるのは時間と労力がかかるものである。

(H12/9/25 記)